

観光文化

Tourism & Culture



財団法人日本交通公社

特集◎ 日本のこころ 桜文化

◆巻頭言

さくらの思い出 中島 千波……①

◆特集

- 桜、その日本のこころ 小川 和佑……②
- さくらサミットと桜文化の醸成 福井 良盟……⑥
- 日本列島の春を彩る多様な桜 佐野 藤右衛門……⑩
- 弘前城の桜
—その歴史・現況と栽培管理の挑戦 小林 勝……⑭
- 荘川桜物語を今に引き継ぐ 大井 哲郎……⑱

◆連載

I あの町この町 第32回

鉄が湯になる —富山県高岡市 池内 紀……⑳

II 風土燦々⑤

いだごろ踊りの山里（後編）—宮崎県美郷町南郷区 飯田 辰彦……㉔

III ホスピタリティーの手触り 53

ニセコで考えたこと 山口 由美……㉓

◆新着図書紹介……㉔



会津・絵ろうそく

幕末の戊辰戦争で激烈な戦火にさらされ白虎隊などの悲劇の舞台となった会津若松。

写真の絵ろうそく作りは、約五百年前、会津藩主・幕名盛信の時代に始まったと伝えられる。その後、歴代藩主の保護を受け会津の貴重な物産として藩の財源の一つとされた。

古来、ろうそくに絵付けの習慣はなかったが、京の雅みやびに雪国の人々の新しい工夫が施された。奥羽地方が発祥地とされる。仏壇に供する花が途絶える季節、ろうそくに花の絵付けをして供えたのが始まりともいわれる。江戸期の街並みが残る七日町通りに元祖「ほしばん(屋号)」「絵ろうそく」店がある。創業は一七七二年(安永元年)、手作り、手描きの伝統美の製法を親子代々伝授、受け継いだ唯一の店である。七代目・星栄作氏が勲八等を授与され、今、十代目・雅人さん(29)が受け継ぎ、「灯心作りと絵付けが一番重要だ」と語る。

母親が絵付け作業に余念がない。一家五人で伝統の民芸美術品を守り続ける姿はすがすがしい。

私が両親・姉兄と横浜に戻ったのは三歳になったばかりのころだったと聞いている。私の記憶に残る一九五〇年ころは、いまだ敗戦の影と進駐軍のカマボコ兵舎とアメリカ兵の住む駐留軍家族の明るい家であった。堀越しの庭は緑の芝に囲まれ、日本人との生活の格差を感じていたころであった。私の住んでいた横浜市南区大岡町は、京浜急行弘明寺駅から徒歩十五分、市電の弘明寺停留所から十分という距離であった。家のそばには大岡川が流れ、小さな木造の橋が架かっていた。両岸の堤は桜並木となつて、満開時などは桜見物や酒盛りなどをするような場所であった。土手の斜面は細竹ややぶが生い茂る所が所々あり、チャンバラごっこやインデアンごっこの隠れ家作りに格好の場所であった。川向こうには畑や田んぼが一面に広がり、本当にのどかな地域であった。それも十年もたつと新道ができ幹線道路となり新興住宅地と化し、トンボやカエル、ドジョウ、ザリガニがいなくなつてしまった。そして、桜並木も歯抜けとなり老朽ちてしまい、風情がなくなつてしまった。

一九六九年、芸大大学院生になつた年に、横浜市緑区恩田町に家族四人が移住することになった。そこは田園風景そのままの土地で、再び田舎の空気とオゾンを感じたい吸うことができるのである。家の後ろは、村の神社の鎮守の森、多摩丘陵の最端の地で、武蔵野が残る所であった。境内には大

さくらの思い出

東京芸術大学美術学部教授 日本画家

中島 千波

きなソメイヨシノ桜と山桜があり、四月には満開の花が楽しめ、桜のスケッチもできる絶好の場であった。私が本格的に桜の細密描写をした最初ではないだろうか。家の居間からは丹沢山塊と大山の向こうに富士山がチョコンと顔を出していた。そして、夕焼け空の美しい景色であった。

私が桜の老樹古木の取材するのは、その十年後の一九八二〜八三年春からになる。岐阜県根尾谷の淡墨桜が最初ではなからうか。根元の幹囲は十メートル以上あるだろう、一般的な桜の樹皮には到底見えず、こぶがごっこででき象の皮のようであり一種靈感を感じさせる雄大さは、私にとって初めての感動であった。それから十年ほどは毎年通い描き続けたのである。また、岐阜県には、飛騨高山に臥龍桜、御母衣ダムの莊川桜などがある。東北地方には山形県に伊佐沢の久保桜、盛岡の石割桜、福島県三春の瀧桜、長野県では、素桜神社の神代桜、原の閑貞桜、山梨県小淵沢の神田桜、武川町の山高神代桜、京都では常照皇寺の御車返しみくるまがえの桜、九重桜、天龍寺の枝重桜、島根県三隅大平桜と枚挙にいとまがないほど全国にわたつて数たくさんあり、私はまだ取材しそこねた場所があるのではないだろうか。名木古木の前に腰を下ろし、桜の花びらが春風に舞い、花吹雪の中でスケッチができる喜びは絵描きにとって最高に心地よい時間と言える。今年も大いに桜の開花に合わせ桜行脚に出掛けようと思つている。

(なかじま ちなみ)

日本のこころ 桜文化

日本の桜、ハナザクラは、日本列島の気候風土に合わせて、今日では多品種となつて成育しています。古くから日本人は、和歌に桜を詠み込み、桜文化というものを築いてきました。今号では、桜と日本人、桜の楽しみ方、桜文化振興への取り組みなど、紹介します。

桜、その日本のこころ

文芸評論家

明治大学リバティアカデミー講師

小川 和佑

桜は聖樹、いまに残る桜信仰

遙かな縄文時代には、すでにこの日本列島に各種の桜が春ごとに花を咲かせていた。

北からシユリザクラ、ウワミズザクラが春の遅い北国に咲き染める。この桜は遠くシベリアから北欧に分布する北方系の桜であった。南からはヤマザクラが、その中間地帯にはエドヒガン、豪雪地帯にはオオヤマザクラが春を告げた。

この列島に生きた私たちの古代人たちは

桜の開花で春の到来を知り、廻る季節をこころに刻んだ。やがて、弥生、古墳の時代を経て三世紀半ば、この国の中央部の四辺を山稜に囲まれた大和の平野、三輪山のふもとに小さな国が生まれた。

それからさらに二百年。五世紀半ば、『日本書紀』の記述では大和の大王イザホワケ（履中）の三年十一月六日、イワレのイチシの池に皇妃とともに水上酒宴を催す。時にイザホワケの酒盃に桜の花弁ひとひらが舞い落ちた。イザホワケは季節外れの桜を不

審に思い、侍臣の一人に桜を求めさせたところ、ワキガミの室山にその桜があった。イザホワケは大いに歓び、これを瑞事として、その王宮をイワレの稚桜宮と改めた。——

ということは、この時代、すでに春ごとの桜の酒宴が推量される。記録としてはこの「履中紀」で初めて桜の文字が使われている。古代人たちは大和を囲む丘陵のヤマザクラをなぜこのように愛したのか。

古代人たちは清明美を尊み、死穢血穢を醜として忌んだ。彼らは桜にその清明美を

見た。その古代信仰はやがて、桜樹信仰となり、八世紀の奈良朝時代には家々の門に異類悪霊の侵入の結界として聖樹桜が植えられた。桜は山野から都へ植樹され、平城京は花の都となる。

春雨に 争ひかねて わが屋前の
桜の花は 咲きそめにけり

この『万葉集』巻第十の「詠花」二十首中一首の「わが屋前の桜」が結界としての桜であり、「家桜」と呼んだとは昭和の国文学者・折口信夫の『古代研究』の説くところであった。

秋田県角館武家屋敷のシダレザクラは、平城京の結界としての家桜を近世江戸期に継承した桜であった。現在では佐竹北家の当主が京の公家から姫を迎え、姫を慰めるために都をしのばせるシダレザクラを植えさせたと言われているが、平安京の寺社、貴族の邸宅の桜もまた、平城京の家桜に倣った結界としての家桜であった。

長い歳月が聖桜としての桜を忘れさせたが、人々の記憶の深奥に聖樹、桜への信仰が一脈の地下水となって伝わっていたのである。

この桜樹信仰は近代明治期になって

一八七二年（明治五年）、学制公布によって各地に小学校が開設されると、その校門から校庭に、幕末に江戸染井村で創出されたソメイヨシノが植樹された。

その桜はおのずと学校という聖域を結界としての家桜ではなかったか。もしも、小学校に花木を植えるならば、ツバキでもハギでもよかつたらうに、あえて桜を選んだところに古代の桜樹信仰がここにも受け継がれていたことを示す。やがて、学期開始が欧米風の九月から日本風の四月になると、入学式に登校する一年生を迎えるように学校の桜は花開くようになった。

女性 は桜の化身、泰平と豊穰を招く

『日本書紀』はもう一つ、桜の本質に関する挿話を記述している。履中、反正と兄弟相伝の大王位を継いだワクゴノスクネ（允恭）は皇妃オシサカの大中姫の妹ソトオシの郎姫を愛したが、皇妃をはばかって、郎姫を忍坂宮から遠い藤原に住まわせた。以来一年、訪れることなく過ごしたが、治世八年の二月、ようやく藤原を訪れ、一夜、愛を交わす。その翌朝、藤原の宮居の井戸の傍らに咲く桜を見て思わず次のような

歌謡を詠む。

花ぐわし 桜の愛で 同愛では

早くは愛です 我が愛する子ら

歌意は「小さく愛らしい桜の花のこのいとしさ。桜を愛するように、なぜわたしはもっと早くからわが姫を愛さなかつたのか」と嘆じている。

この挿話もワクゴノスクネ以前に桜は美しい女人。美しい女人は桜の精霊であるとの認識が古代人たちに定着していたと思える。

以後、『万葉集』の人麻呂、家持の歌や、桜児説話が、この允恭帝の記紀歌謡の桜観を受け継ぎ、近世半ばまで女人は桜、桜は女人であった。

女人は桜であることは、桜は泰平と豊穰の花となる。女人にとつては何よりも平和と豊かな実りは稀求であった。桜はそれを具現する。私たちの桜愛はこうした『日本書紀』の記述に由来している。

その女人は桜の俚謡を挙げる。中世室町末期一五二八年（永正十五年）ころにまとめられた『閑呼集』に収められた俚謡である。

神ぞしるらむ春日野の
寧楽のみやこに年を経て

さかりふけゆく八重桜

さかりふけゆく八重桜

ちるはほどなく露の身の

風をまつほどばかり

うきことしげくなくもがな

うきことしげくなくもがな (二八)

ここに歌われている「寧楽の八重桜」は王朝の女流歌人・伊勢大輔が、一条天皇に奈良から珍しい八重桜が献上された折、

いにしへの 奈良の都の 八重桜

今日九重に 匂ひぬるかな

と詠んでその機智が一条天皇の御感にあずかったと、藤原清輔の歌書『袋草子』にある。ナラノヤエザクラはカスミザクラの変異種で花片の重の多い八重咲きの里桜（栽培品種）であり、奈良県の県花で天然記念物に指定されている。

永正十五年というと応仁の乱に続く戦国時代の初期である。殺伐とした時代の中で歌われた桜の俚語は女の盛りを虚しく過ぎゆく女ごころを擲々と歌って、合戦に明け暮れる都の武士たちに、あの女人の豊かな胸に抱かれた温かい平穏を思わせたであろう。

その「女人は桜の化身」という桜観を変

えたのは『仮名手本忠臣蔵』（一七四八年〔寛延元年〕初演）の十段目「天河屋」の場で天河屋義平の白詞「花は桜木、人は武士」の一言が桜観を変え、幕末の志士たちは自らを桜と観じて討幕運動の渦中に散華していった。

明治初頭、徴兵によって組織された兵士たちの精神の支柱を武士道の桜をもって確立した長州閥の軍事官僚は、桜を「軍国の花」として第二次大戦終了（一九四五年〔昭和二十年〕）まで、この桜観を強要した。桜は遂には散華の花となり、死の花となって第二次大戦を終える。

桜が本来の「女人は桜の化身」に甦るには一九七〇年代の水上勉の『櫻守』、宇野千代の『薄墨の桜』まで待たねばならなかった。

甦る桜

戦後四半世紀。桜は、水上勉、宇野千代らの文学によって、軍国の花、散華の花の呪縛から解放された。その後、渡辺淳一の『桜の樹の下で』、中村真一郎の『美神との戯れ』、辻井喬の『西行桜』などの名作が、軍国の花、散華の花の呪縛を完全に解いた。

桜は再び、美しい女人の化身に甦る。こ

これらの文学の影響は大きかった。

そればかりではない。戦後、戦災やファシズム忌否で無視され荒廃した桜を千代田区の職員・新堀栄一が、一九五五年（昭和三十年）、千代田区千鳥ヶ淵の緑道建設にあたって、緑道ばかりでなく濠の斜面を含めて清水門の土手までソメイヨシノを植樹した。当時はまだ戦没者墓苑もなかったころである。

その後十年。千鳥ヶ淵の桜は東京の新しい桜の名所となって人々の注目を集めた。ライトアップされた夜桜の美しさは、渡辺淳一の『桜の樹の下で』で描かれる。

新堀栄一のこの植桜は全国の桜の復興の魁となる。それを支援した日本花の会を通じた全国の市町村での桜の植樹も書き落とせない。

植えられた桜の品種はソメイヨシノばかりでなくソトオリヒメ、サノザクラのヤマザクラ系から紅の濃いヨウコウや八重咲きのカンザンまで、多種多様の桜であった。

その中でも際立った桜は東京千代田区神田駿河台の太田姫稲荷からニコライ坂を横断する道灌道のスルガダイニオイの並木である。ここには駿河台東部町会長の佐藤正



緑道に広がる千鳥ヶ淵のソメイヨシノ



道灌道のスルガダイニオイ

幸の苦心の実った結
果がある。
オオシマザクラ系
のスルガダイニオイ
は遅咲きである。ソ
メイヨシノが散り、
八重桜の咲く四月
中旬過ぎようやく

開花する。昼、車の往来の激しい時間には
気づかないが、早朝にこの道灌道を歩けば
馥郁ふよくと花の香りが漂っている。二十三区唯
一、ここだけが花の薫り豊かな樹下の道で
あつた。この樹下を歩むとき、桜の甦よめりを
沁々しみじみと実感するであらう。

(おがわ かずすけ)

さくらサミットと桜文化の醸成

竹林院住職 吉野町前町長

福井 良盟

「さくらサミット」の成立と経緯

一九八七年（昭和六十二年）六月に閣議決定された第四次全国総合開発計画は、「多極分散型国土の形成」を基本目標とし、開発方式として「交流ネットワーク構想」を打ち出した。交流ネットワーク構想の柱は三本。そのうちの一本が、都市と農村との広域的交流など、「各地域の特性を生かした多様な交流の推進」であった。この時代、自治体が活性化していくためには、自治体同士の協力関係をより一層深め、「地域間交流」を促進することにより「交流人口」を増やしていくことが強く求められていた。

「さくらサミット」は、こうした時代背景の下、地方の一自治体である島根県木次町（現・雲南市）が先導して始めたものであるが、いかにも「地方の意気込みの強さ」が

感じられはしないだろうか。それはまさしく、四全総が追求した課題への一つの回答であった。

「さくらの咲く健康のまちづくり」を総合振興計画の柱としていた木次町は、「桜」をまち（づくり）のシンボルとし、地域の活性化を図ろうとしている全国の自治体に加盟を呼びかけた。こうして、一九八八年（昭和六十三年）四月、第一回の「さくらサミット」が木次町で開催されたのである。

以来、本サミットは、あくまでも開催地自治体の特性を生かしたテーマ設定としながら、加盟自治体の要望も充足できるように調整して実施されてきている。こうして延々二十年以上にわたり「さくらサミット」が継続してこられたのも、何よりも加盟自治体（注）の各首長が本サミットを愛し、ともかく継続していこうと志した、そのチームワー

クの良さが然らしめたものと思う。

さくらサミット コーディネーター

篠田 伸夫

日本一の桜

さくらサミットに集まる首長のほとんどは、わが町の桜こそ「日本一」だと信じている。正確に言えば、日本一の桜は世界一でもあるわけだが、誰も「世界一」とは言わない。桜論議の場では、日本一は世界一よりも格上なのである。それぞれの桜は、日本一と言ってもよい理由を備えている。長崎県大村市長はオオムラザクラの重なり合った花弁の豪華さを、長野県高遠町（現・伊那市）長はコヒガンザクラの可憐な姿を、北海道静内町長は二十間道路に並ぶエゾヒガンの雄大な景観を、秋田県角館町（現・仙北市）長は武家屋敷と調和のとれたシダレザクラ



吉野山の桜
下・中・上・奥の千本に植えられた桜は、総計3万本。すべてシロヤマザクラである

と地場産業の樺細工を、東京都北区長は飛鳥山公園のソメイヨシノを、群馬県鬼石町（現・藤岡市）長は三千本のフユザクラを、島根県木次町（現・雲南市）長は三十万本の桜を植樹するという目標の大きさを、茨城県日立市長は公害から市を救った桜に対する市民の感謝の気持ちをも、埼玉県幸手市長は市民と一緒に桜を育てているこ

とを、誇らしげに、熱っぽく語る。サミットといえながら、おのおのの日本一論に異議・反論は出てこない。視点をちよつとずらせば、皆「日本一」なのである。もちろん私（福井）も、吉野山のシロヤマザクラが日本一と言い切った。そして、それぞれの首長の主張する日本一に賛同もした。

さくらサミットが始められたのは昭和の末年である。そのころのわが国は、世界一の経済大国を勝ち取り、追いつけ追い越せの次に目標とすべきスローガンを探し求め、見つけることができないままに、初めての

バブル崩壊に苦しみ始めた。政策的には「多極分散型国土の形成」が提唱され、「ふるさと創生」の一億円を使わせていただくことになった。日本一の桜を持つ自治体も地域再生のための施策を模索することになったが、桜を選んだのは、加盟自治体の半数にもならなかったと思う。私が町長をしていた奈良県吉野町でも、結局は桜以外の目標設定を取り上げざるを得なかった。この時の反省から、役場の職員に対して「事業を決める時には、わが町が、日本に、人類のために何ができるかということが一番に考えよう」と言って、「町長の話は遠回りすぎ

る」と批判を買っていたようである。

私たちの吉野町でもサミットを開くことになった。事前会議に担当課長が出席し日程やテーマ等を決定する。日程はこちらの都合で決まるが、テーマに問題があった。「さくらサミットとまちづくり」に決まりました、という報告。「それでは吉野で開催する意味がない」としかりつけたが、事前会議はもう終わっている。妥協案として、テーマを二つにし、「桜文化の醸成」を付け加え、当日配布するパンフレットの表紙にはそれだけを掲げることにした。

この時私は、吉野山小学校の校長だった宮坂敏和先生のことを思い出していた。戦後間もなくのころである。荒廃した吉野山の桜樹林をよみがえらせようと、毎年六月初旬、児童たちの宿題として、サクランボ拾いを命じた。集まったサクランボは、上級生が手を真っ赤にしながら果肉を取り去り、水に浸けて沈んだ種だけを畑にまき、先生と育友会役員が手入れして苗木を作った。育った苗木は、卒業記念樹等として公園に植樹するほか、全国の学校に募って希望本数を送付した。ところがこの活動に住民の一部から疑問が寄せられたようである。

「こんなことをしていたら吉野山の『日本一』の座が危うい」と。校長は卒業式の式辞で、熱を込めてきっぱり反論した。「送られた桜は全国の学校で『日本一の分身』として大切に育てられるだろう。それは日本国のためにもなるし、吉野山のためにも良いことだ」と。

桜文化

桜は日本を代表する花木である。大抵の日本人にとって「花見をする」というのは桜の花を楽しむこと、時にはそのために旅行に出かけることである。風景写真に桜の花が入っていれば、日本の景色であって、外国を想像する人はいない。多様な花の中で特に桜を愛でる風習は日本人の特性とも言える。この特性はわが国民の歴史とともにさかのぼるのかといえは、そうでもないらしい。高校の古文の時間に「日本人が桜を特別な花木と見るようになったのは、平安時代、遣唐使の廃止以降の国風文化が興った時である」と教わった記憶がある。中国唐代に特別な力を持つ花とされた梅の木を同じように重宝がっていた上古の慣習が、国風文化の時代に、桜の木に変わっていつ

たというのである。

このような時代的变化は、私ども吉野にかかわる文芸作品にも明確に表れている。八世紀の『懐風藻』や『万葉集』にも吉野を詠んだ詩歌は多数載せられているが、桜と結びつくものは皆無である。一〇世紀初頭の『古今和歌集』になると、紀貫之による序文に「春の朝、吉野の山の桜は人麿が心には雲かとのみなむ覚えける」と記されるほか、三首の歌が取り上げられている。さらに二三世紀初撰の『新古今和歌集』になると、多くの人がたくさんの桜の歌を寄せるようになっていく。新古今の歌が詠まれた平安末期は、西行法師が自己の身体以上に桜を愛し、吉野山に庵を構えた時期でもある。また吉野山・金の御嶽が日本の宗教的聖地として不動の評価を獲得した時代とも重なる。桜は修験道山伏の御本尊・蔵王権現の御神木とされた。蔵王権現の直近に桜を植える猷木の風習は、長く吉野山に受け継がれ、桜樹林全体の規模を拡大していった。

一八世紀、国学者・本居宣長は『古事記』や『源氏物語』の中に「日本のこころ」を探求し、時に平安文学に表出された日本



金峯山寺蔵王堂
桜は本尊蔵王権現の御神木として、崇敬者によって猷木されたものと伝えられる

精神を「もののあはれ」と銘打った。そして、もののあはれの精神文化をヤマザクラの姿と重ね合わせることになる。『本居宣長六十一歳自画自賛像』に書きつけられた「しき嶋のやまごころを人とは朝日に、ほふ山ざくら花」の歌は当時第一級の国学者をして、ヤマザクラは日本文化そのものであると言わせたことになる。

異論かもしれないが、日本文化を学ぶ者には、小林秀雄さん等の難解な文章を習読

する傍ら、ヤマザクラをポーッと眺めていることをお勧めしたい。およそ文化は人間によって創り出される。しかし、人間の創り出したものすべてを文化と呼ぶものではない。人間の感性に適合し、人々を幸せに導くものでなければならぬ。文化を創造するには、天才のひらめきに期待するだけではなく、世代を超えた長い年月の積み重ね、こだわりの継続が大切なことはいくらでもない。

さくらサミット in 吉野

吉野町でのさくらサミットは、一九九四年（平成六年）四月二十日に開催された。この年の満開は過ぎていたが、一部の方にはヤマザクラ特有の花吹雪を味わっていた。私の発言内容は、これまで十七回の主張と合わせ概略前項のようなのだが、対談の後、会場に意見を求めた。福本藤治郎氏（年長の町会議員）が、古老の教えとして「海の漁師は海で死ぬ、死んで魚の餌になれ。山の猟師は山で死ぬ、死んで桜の餌やしになれ」という訓示を披露してくれた。

吉野山の桜は、日本の四季のうち、春を代表する風景として、国会議事堂正面口



西行庵
12世紀末、西行法師はここで隠遁生活を送った。現在の建物は再建されたもの

ビー上方に描かれている。二〇〇四年（平成十六年）には「紀伊山地の霊場と参詣道」における重要な文化的景観としてユネスコの世界文化遺産にも仲間入りすることができた。「顕著で普遍的な価値」を有し、後世に残すべき人類の遺産として世界中から認められたことになる。それでも、吉野山の住民も桜の保護を担っている財団法人吉野山保勝会も「世界二」とは言わない。「日本

一の桜の名所」であり続けたいと願っている。桜は恐ろしいまでに人間に似た生物である。吉野山の桜は近年、老衰の兆候が見え始め、たくさんの人々にご心配をおかけしながら、一方、JTB、京都大学、住友信託銀行、読売新聞等のご支援を得て若返りを図っている。

桜を守っていくには、西行や宣長に学び、自己の身体と同じ値打ちあるものとしての符合を続けねばならない。

（ふくい りょうめい）

（注）平成二十二年三月現在の加盟自治体（二十団体）

新ひだか町（北海道） 柴田町（宮城県）
仙北市（秋田県） 富岡町（福島県）
日立市（茨城県） 前橋市（群馬県）
北本市（埼玉県） 幸手市（埼玉県）
北区（東京都） 新発田市（新潟県）
上越市（新潟県） 伊那市（長野県）
本巢市（岐阜県） 吉野町（奈良県）
南都町（鳥取県） 益田市（島根県）
雲南市（島根県） 大村市（長崎県）
水上村（熊本県） 北郷町（宮崎県）

〈問い合わせ〉

「さくらサミット」常設事務局／

（株）ぎょうせい開発課

TEL：03（6892）6636

加盟自治体を随時募集

日本列島の春を彩る多様な桜

(株)植藤造園 代表取締役社長

佐野 藤右衛門

弥生

このころになると、あらゆる生物が活動期に入る。気温も上がり日も長くなり春を実感するこの時期、日本人独特の感性が出てくる。季語もいろいろあり、地方により生活習慣から成ることわざなどがあるが、今では禁句となり言葉が伝わらないものが多い。文字もいろいろあり、文字によって人の心が異なる時がある。例えば、桜一文字の時、さくら、サクラ、佐久良等すべて感じ方が違うのが面白い。

このように桜とは何かと言われても答えるに困ることがある。なぜか？桜は、日本国中どこにでも自生している。南は沖縄から北は北海道、今では外国になってしまっただが北限といわれる樺太、千島列島まで自生している。自生するのにも自然界のいろ

いろの仕組みにより生存しているが、今日の社会情勢の中で自然の仕組みが壊されてきている。この壊れる原因はほとんど人為的なものが多い。生活様式の変化によるのが大半である。ではどう変化してきたのか一言で言うならば、人間といえども地球上の生物であること、分類上では動物であることを忘れ人間は別のものであると思いがり、人間のみの便利だけを追い求め自然の仕組みを駄目にしてきた結果である。学問的・学術的なことも大切であるが、桜を求める時に、もう一度自然の仕組みを考えながら見る必要がある。

風土と桜

前述のように南は沖縄のカンザクラに始まり、日本列島を北上し九州から四国、本州と最終には北海道へと続いていく。この

期間、一月末ころから七月初めまで約六カ月の間、日本列島を駆け上がっていく。この日本列島も各地方により気候風土が異な



開花時の麻蒔(おまき)桜(兵庫)

り、本州の中央部の山岳地を中心に日本海側と太平洋側では全く異なった風土ができています。まず、植物の分布、動物の生息、昆虫類、土質、地質、山の傾斜、水の流れ、風向等もろもろの要素が絡み合い、その中に人間の生活様式が各地に出来上がっている。これらは、その土地の自然の仕組みをうまく取り入れ生活している。この中でその地方独特の文化が生まれ、四季を通じさまざまな行事とともに共同生活をし、その

土地の言語（方言）、味、祭り等が生まれる。日本は農耕民族であり、その中でも水耕農耕民族であることから、特に自然に対しては、おのずから身に着けている。

なかでも春とともに花を咲かせる桜については、農耕の目安として生活を共にしたものが多い。その中の一例を挙げると、大分県日出町の魚見桜、兵庫県竹野町の麻蔘桜、岩手県東和町の種蔘桜、二戸市の麻蔘桜等、日本各地に点在している。また、神

社仏閣等には歴史上の人物の逸話として残っているものもある。これらの桜は、その地方地方になじんで樹齢数百年を超える大木である。これらの桜の開花に合わせ、あらゆる行事が行われている。

桜の三大種別

これらの桜は大半がその土地で自生し生き永らえてきたものがほとんどである。ではどのようにして自生し生き残れたかであ



吉野の千本桜(奈良)



志都岐神社のミドリヨシノ(山口)

る。大別して、桜は三つに分けて考えることができる。ヤマザクラ、ヒガンザクラ、オオシマザクラ等である。これらが、交雑を繰り返しながら子孫を残した結果である。これらも自然の仕組みの中で鳥や昆虫の助けを借り、繁殖して枯死し、強い遺伝子を持ったものが子孫を残すという繰り返してある。このようなことを踏まえながら、桜の分布がどのように広がっているかを述べるとする。

日本列島を二つに分け関東以西と関東以北、これをまた日本海側と太平洋側に分けるとよく分かる。数量的に一番多いのがヤマザクラ系である。これも各地の風土や他の植生によつてそれぞれ特色がある。今日まで他の書籍や写真集等が多く発行されているので詳しくは述べないが、九州地方では成長が早く大木になるが花の付きが少なめであり、青芽が多い。これを助けるためにツツジ類と同居し力を出し合い、一つひとつの景色を作り出している。四国地方は、周囲の海が近く、中心部の山岳地が急斜面であり、この斜面を利用してミカン等の果樹農耕地として利用しているため、わずかに残った場所にヤマザクラが点在し、四国

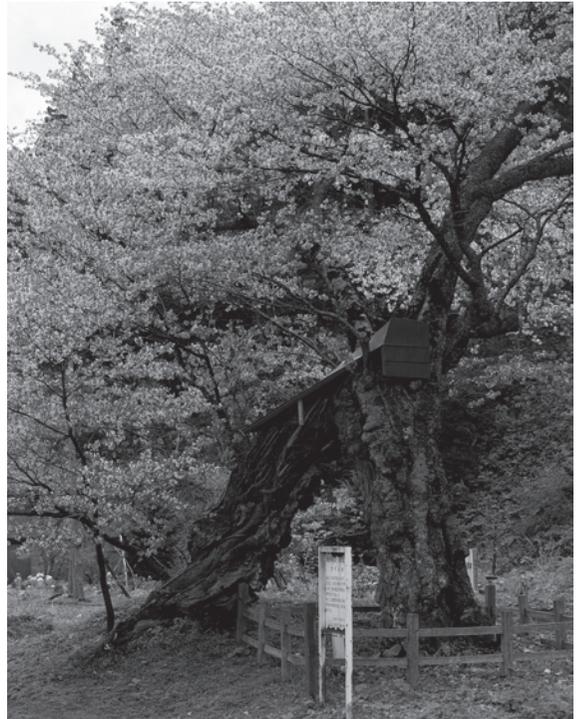
山脈独特の風景と生活様式ができて

いる。本州では、山口県に始まり中国山脈を中心に日本海側と太平洋側で異なる分布生態が見られる。この地方からは、ヒガンザクラの大木が目につくようになる。ヒガンザクラはヤマザクラより

やや寒さを好むので、中国山脈の裾野では海から少し山間部

に入った所にヤマザクラの群生が見られる。この景色も、近年松枯れが発生し、昔日のような景色はなくなり殺風景な風情になっている。アカマツ林の中の緑に溶け込んだ景色はもはや取り戻せない。このような分布が近畿地方北部まで続き、兵庫県の日本海側には大木が多く見られる。太平洋側にはヤマザクラ群が各所に見られる。代表的なのは、奈良県の吉野山である。

中部地方になると、山岳部分がより高山



かすみ温泉のカシミザクラ(秋田)

となり桜もヤマザクラからマメザクラ、カシミザクラ、ミネザクラと多様な種が出てくる。特に岐阜県、長野県にはオオヤマザクラ系も見られる。日本海側では、石川県、富山県にかけて、ハクサン系のマメザクラ、ミヤマザクラ等が見られる。この中でヒガンザクラの大木が点在し、今でもその地方の人々によつて守り育てられ、それぞれの物語を持っている。関東以北になると、寒冷地となり桜も他の植物も寒冷地に適した分布に変化する大きな特徴として、常緑広

葉樹がほとんど見られず、桜の花期に同時に他の植物も発芽開花する。この地方になると、ヒガンザクラが多く目につき、村の高台に必ずと言っていいほど二本見られる。これらの幹下にはほこらがあり、村人たちが大切にしてきた証しと分かる。桜も変化し寒冷地に強いベニヤマザクラ、オオヤマザクラ、チョウジザクラと変化していき、北海道ではほとんどベニヤマザクラになっていく。北限とされる根室ではチシマザクラ、稚内宗谷地方ではエトロフザクラが見られる。

特徴の一つとして、伊豆半島から伊豆大



エトロフザクラ

島にかけてはオオシマザクラが自生している。伊豆大島には、二千年と推定される大株が現在も生育している。また、富士山周辺にはマメザクラから進化変化したフジザクラのみが生育し富士山との調和のとれた風景を醸し出している。

このように日本列島に点在している桜が、常に交雑し突然変異をしてできたものがサトザクラである。現在では、人工交配して作られたものが新種として出回っていることもある。変異した時期や年代等はすべて定かではないものが多いが、品種名として付けられている。それらの名前を見ると、

皆物語があり、また、桜にまつわる土地柄、地名、人物名など興味深いものがある。

桜の楽しみ方

前述のように、桜を求め旅をする時は、まずその土地のことを知り歴史を知り風土を知り、旅案

内とともにその土地の古老の話を聞きながら桜を知ると、なお面白みが増してくると思う。このように日本の野山にはまだまだ人の目につかない桜がいっぱいあると思う。名勝地や何々桜と現存している桜もいろいろ、野山に自生している桜を求め自然の仕組みを見ながら散策し、新しい発見をするのも一興かと。人工的なソメイヨシノを見るより楽しみが倍増すると思う。

(さの とうえもん)



根室清隆寺のチシマザクラ(北海道)

弘前城の桜——その歴史・現況と栽培管理の挑戦

弘前市商工観光部公園緑地課 主幹

樹木医

小林 勝

一八九五年（明治二十八年）に開設され

た弘前公園は、弘前城跡地が公園となっており、本丸をはじめとする六つの郭や三重に巡らされた濠、土塁などが藩政時代のままに保存されていることから全域史跡に指定されている。また、桜の名所として毎年二百万人を超える観光客でにぎわっているが、二〇一〇年（平成二十二年）には東北新幹線新青森駅の営業が開始され、翌二〇一一年（二十三年）には弘前城築城四百年を迎えることから、弘前公園の桜は観光都市・弘前市の代表的観光資源としてみず重要視されている。

弘前城の桜の歴史

弘前城の桜は、藩日記によると一七一五年（正徳五年）に藩士が京都からカスミザクラを二十五本持参し、城内に植栽したの

が始まりとされている。

弘前城は廃藩後の一八九五年に一部を除いて公園として開放されるが、それより前の一八八二年（明治十五年）には旧藩士の菊池植衛が、旧城内の荒廃を見かねてソメイヨシノ（当時は吉野桜と呼ばれていた）を千本植栽している。しかし当時はまだ土族の勢力が強く、藩主が住んでいた城内で町民や農民が花見をするなどは許されないと、大半のものは植栽後すぐに旧藩士らによって抜かれたり、切られたりしたとも伝えられている。植えた場所は二の丸や西の郭とされているが、現在残っているのは二の丸与力番所隣に一本と、西の郭の約二十本である。

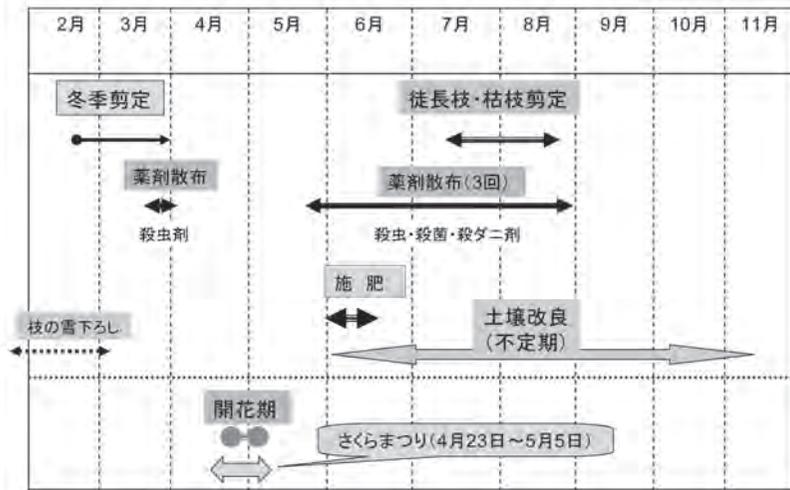
一九〇一〜〇三年（明治三十四〜三十六年）には旧藩士で市議会議員の内山覚弥が千本のソメイヨシノを本丸や二の丸、西の

郭に植栽し、また一九一四年（大正三年）には、弘前市在住の宮城県人会がシタレザクラ等を寄付し本丸・二の丸などに植栽、さらに一九五六年（昭和三十一年）には市議会議員の福士忠吉がソメイヨシノを千三百本寄付している。一九〇一年ころの植栽のうち、特に緑の相談所の中庭のものは幹周五・三七メートルで、ソメイヨシノとしては日本一の大径木となっている。

桜の現況

廃藩後の記録では、一八八二年から一九八五年（昭和六十年）にかけて寄付などにより五千本を超える桜が植栽され、そのうちソメイヨシノは約三千五百本であった。しかし二〇〇〇年（平成十二年）の弘前市による調査では、弘前公園の桜は五十二品種二千六百二十一本で、そのうち

表1 弘前公園におけるソメイヨシノ管理暦



ソメイヨシノは千七百四十四本であり、過去の植栽記録から見ると約半数しか残っていないことが分かった。また、ほとんどの桜は腐朽菌に侵されていたが、樹勢は比較的良好か普通のものが九九%であった。ただし、二〇〇二年（平成十四年）から三年間

実施した二百四十三本の土壤改良作業により、九割以上の桜が根頭ガンシユ病やネコブセンチュウ病に侵されていることが分かっている。

現在見られる桜は一九〇一年以後植栽のものがほとんどであるが、一九〇一〜〇三年のソメイヨシノは、幹周や樹体の状況から約三百本以上残っていると考えられ、樹齢は百年を超している。シダレザクラは、本丸や天守付近の石垣沿いに植栽されたものが間もなく樹齢百年で、今では名木といわれるほどになり、ソメイヨシノと並んで観光客の人気をさらっている。

桜管理の実際

現在の管理内容を簡単に紹介すると、表1のようになる。種々の公園管理作業や予算との関係で理想的な時期に実施しているわけではないが、毎年必ず実施する主な作業項目を示している。

薬剤散布は、発生する害虫の種類や時期を予測し、発生初期に行うようにしている。常に葉や新枝の状況などを観察することが大切である。また、公園内の土壌はほとんどが踏圧によって固結しており、根の健全

な成長を促すためには施肥だけでなく土壤改良が不可欠な作業であることから、毎年対象木をあらかじめ選定し、できるだけ行うようにしている。

剪定（写真1）は若返りのための剪定を二〜三月に行い、病害虫の活動が停止している時期であることから、かなり太い枝も切り落としている。サクラテングス病もこの時に落とし忘れてはいけない。剪定にあたっては、切るべき枝と切る場所の見極めが大切である。施肥（写真2）は花後に壺肥方式で有機入り化成肥料を与える。樹冠下の全体に与えるのがポイントである。

歴代の桜管理担当職員とその手法

弘前城の桜は、近年お城と桜の名所、夜桜が素晴らしい名所などで観光客や写真家などのアンケートにより日本一といわれている。樹齢百年を超すソメイヨシノが三百本以上あり、しかも若い樹以上のボリュームのある花を咲かせていることは、これまで継続してきた管理のたまものである。

ソメイヨシノは病害に弱く短命であるという評価が一般的であるが、弘前公園で

はリンゴの栽培管理法を参考としてソメイヨシノの管理を実施し、剪定や施肥などいろいろな工夫を重ねた結果、新枝の発生と不定根の発生を促進させ樹体の若返りを図ることとなり、弘前方式として全国の桜管理者に広く認知されるようになった。

桜の管理を本格的に始めたのは、一九五二年（昭和二十七年）に管理事務所が設置された後の一九五五年ころからといわれている。管理事務所が設置されたころは、明治期に植栽されたソメイヨシノが樹齢五十年を超すようになり、樹勢の衰えが目立ち、幹や枝に病気が蔓延していたようである。それまで弘前公園は観光バスやタクシーなどの出入りが自由であったため、まず公園入り口に車止めを設置し、また園路と植栽地を区別するなど、桜が育つ環境整備から始めている。

「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」のことわざに反して剪定を始めたのは、作業員が指示を聞き間違えて太い枝を切ったことから始まったようである。その作業員は実家がリング農家であったことから、リンゴの剪定と同様にサクラを剪定したのである。結果として新枝の成長が促進され花付きも良く

なったことから、当時の所長（工藤長政）がリンゴ栽培技術を研究し、それを桜に応用したのである。それ以来、桜の管理は剪定と施肥による

新枝の成長促進、病害虫の徹底防除、生育環境の整備を基本に行われてきた。しかし、剪定については一部の市民や学者から批判を受け、マスコミにも大きく取り上げられている。確かに樹形は畑のリンゴに似ており決して自然樹形ではない。そして芯止めした大きな切り口からは腐朽菌が入っているものが多い。それでも残された幹からは強い主枝が伸び、花もたくさん咲いている。工藤所長は自ら現場を踏み、結果を残した経験から批判をはねのけたのである。

二代目所長（石戸谷恵二郎、のち公園緑



写真1 冬期剪定の様子

地課長）はそのようなこともあって剪定を積極的にはせず、施肥中心の樹勢回復を行っている。それは結果として弘前公園の



写真2 施肥穴掘りの様子

桜全体の樹勢を押し上げ、花付きをさらによくしてきたのである。初代、二代の所長は、植物の管理については当初は素人同然

であったといわれる。公園の管理者という職に就いてから努力して勉強したのである。

石戸谷所長の時に職員として入った小林

範士（筆者の兄）は、高校時

代から植物に知識があり、特に分類については専門家に引けをとらないほどであった。

桜の管理についてはやはり弘前公園に勤務するようになってから勉強したのであるが、その後管理を任せられるようになり、一九九一年（平成三年）に第一期の樹木医資格を得ている。同時にそれまでの管理方法や理論を誰にでも説明できるようにまとめ上げ、弘前公園で行われた日本樹木医会の研修資料として配布している。しかし、二〇〇〇年、勤務中に脳溢血により倒れ職場復帰できず、〇三年に退職した。

筆者は市の外郭団体に採用され、弘前公園内の植物園や緑の相談所を担当し、

一九九二年（平成四年）に樹木医二期生となった。兄が倒れてからの桜管理は経験豊富な公園緑地課の作業員により進められた

が、本丸のヤエベニシダレの芽出し不良やソメイヨシノのコウヤク病蔓延など、樹勢

の衰えが目につくようになり、二〇〇四年（平成十六年）四月から筆者が公園緑地課に籍を移し、桜を中心とする弘前公園の樹木

管理を担当することとなった。現在、先に述べた先輩たちが築いてきた技術を検証しながら、作業の省力化、農薬の減少化、そして剪定技術のマニユアル化を目標に管理方法を模索している状況である。

結びに代えて

以上のように、弘前公園の桜は歴代の職員による創意工夫と、それを実行する現業職員の技術の継承が行われ、しかも業者任せではなく、市の直営で臨機に対応した管理が行われてきた。その方法が今日の弘前公園の桜を作り上げてきた。また、市民の弘前公園の桜に対する思いが、恐らく他市とは比較できないほどの桜管理費を市の予算から支出させているのである。

（こばやし まさる）

莊川桜物語を今に引き継ぐ

Jパワー(電源開発株)広報室課長

大井 哲郎

はじめに

一九六〇年(昭和三十五年)十一月十五日、岐阜県莊川村(現・高山市莊川町)で、樹木の移植としては世界でも前例のない大規模な作業(高低差五十メートル、移動距離六百メートル)が開始された。村内の寺の境内にあつて人々に親しまれていた樹齢四百年以上にもなる二本の桜を、当社御母衣^ろダム・発電所の建設により村の一部が水没するため、ダム湖を見下ろす高台に移し、移植しようという試みである。

移植のきっかけは、ダム建設の際に当時の当社総裁(初代)だった高碕達之助が発した一言。村民による建設反対運動の解散式に招かれた氏は、湖底に沈む村の様子を視察中に一本の老桜に目を留め、「この桜を水没から助けたい」と語ったのである。当

時の技術ではまず不可能であろうといわれた移植プロジェクトも無事成功し、二本の桜は無事に根付き、一九六二年(昭和三十七年)に当時の藤井崇治総裁により「莊川桜」と命名された。

高碕・初代総裁が残した魂は後世にも引き継がれている。

当社は創立五十周年を記念して、二〇〇二年(平成十四年)度から五年間をかけて莊川桜の実から育てた苗木を小学校・中学校を中心に百カ所以上で贈呈により植樹を行った。莊川桜を題材にした小学生・中学生用教材に至っては、九百カ所以上で配布しており、子供たちの自然環境を大切にすることを育もうと試みたのである。

以下に、当社が全国で実施した莊川桜物語の、魂のリレーを紹介する。

莊川桜物語を今に引き継ぐ

—— 莊川桜二世植樹プロジェクトの実施

当社創立五十周年を機として、二〇〇二年度以降、広報室が中心となり、莊川桜二世植樹プロジェクトを実施した。桜の植樹では、元国鉄バス「名金線」の名車掌でもあり、一九七七年(昭和五十二年)に「太平洋と日本海を桜でつなごう」というスローガンで名金(名古屋)金沢(線沿いに三十万本の桜を植えることを目指した佐藤良二氏(一九二九—一九七七)が有名だが、当社も二〇〇二年度以降、五年間にわたり、全国の小学校・中学校を中心に百カ所、莊川桜の苗木の植樹を目指した。プロジェクト化の理由としては、高碕・初代総裁が残した魂である「人間の営みをしていく上で開発は必要であるが、できる限り自



写真1 100カ所目となる植樹達成（雲雀丘山手公園にて）

然環境に配慮し、「大切にする精神」を子供たちのこころの中に育もうとしたのである。これは、御母衣タム湖畔にたたくずむ荘川桜の下で、その種を実際に拾い発芽させた実生を一メートル程度の苗木まで育てポットに

入れた上で、荘川桜のいわれを綴った銘板とともに寄贈するという事業であり、荘川桜の苗木が育っている所には、銘板が一本立てられており、荘川桜の説明がされている。

植樹先（寄贈先）には、原則として当社とかかわりのある自治体から学校などの施設を選定することとし、当社の各機関が窓口となっておのおのの地域において声掛けをしてきたのである。こうして、二〇〇二年度以降、五年間にわたって順次二世の植樹を実施、そして、二〇〇六年（平成十八年）十二月十七日、兵庫県宝塚市にある雲雀丘山手公園での植樹をもって、とうとう当初からの目標だった「100カ所植樹」を達成したのである（写真1）。

百カ所目の植樹先が偶然にも高碛・初代総裁がかつて構えていた屋敷の近くであったことは何か深い縁を感じ、こころの底からわき出る喜びを感じ、感極まるものがあった。

結果的に二〇〇七年（平成十九年）三月末までに百十八カ所での植樹を達成したが、表1の通り、近畿や中部、四国に集中している。当社水力発電所が十地点もある北海道でなぜ実績がないか、九州では四カ所しかなく、当社石炭火力発電所や海水揚水発電所が稼働している沖縄県でなぜ全く実績がないかと思われるかもしれないが、荘川桜はヤマザクラ種のアズマヒガンザクラであり、植樹時期は落葉時の十一月〜三月というのが最もふさわしく、同時期において余りにも降雪が著しい地域や、気候的に余りにも暑すぎる地域は、植樹後の成長がうまくいかないといわれているためである。そのようなこともあり、他の地域に比べれば比較的气候条件の制約を受けない近畿や四国、中部地区の愛知県などに集中することとなった（三地域だけで、全体の八〇%以上、九十七カ所に達している）。

植樹先のリストについては表2の通りである。小学校の四十七カ所を筆頭に、中学校三十二カ所、幼稚園六カ所と続いている。もともと、当社の発電所がある地域において積極的に植樹していこうと決めたのだが、計画が始まると、さまざまな施設に口コミ

で伝わっていくのである。社会福祉施設や公民館、公園などでの植樹のみならず、神社での植樹、学校関係では高校での植樹も実施した。社会福祉施設の中には、当社が創立四十周年（一九九二年）をきっかけに地域への謝意を込めて実施した三重奏や二重奏などによるクラシックコンサート（略称「J・POWERふれあいコンサート」）開催先も含まれ、当社がこのような自然環境を育む社会貢献事業を行っているところから聞きつけ、要望があったものである。しっかりと福祉施設の門の近くで根付いている荘川桜を見て、施設に入居されている皆様もさぞ、荘川桜の日々の成長を楽しみにしていることと思われる。

本プロジェクトには、荘川桜二世植樹のみならず、荘川桜大移植プロジェクトを通して自然環境を大切にするところを育もうと、小学生向け、中学生向け、教員向けの「荘川桜から学ぼう」教材を業者に依頼して製作し、全国の各施設に無料で配布した。これら教材は、荘川桜移植にまつわる話から「エネルギーと環境の共生」の考え方を、体系づけて学んでもらえるように教育の専門家の方々からも意見を聞いて製作

したのである。こうして、二世移植プロジェクトとともに進められた教材などの配布だが、二〇〇七年三月末時点で、その配布先は小中学校など合わせて九百校以上に達した。児童・生徒たちに配布されたり、道徳等の授業で実際に使用されたりしたが、教材そのものが桜という身近なものを題材にしていること、戦後の日本にとってどうしてエネルギー開発が必要であったか、開発

表1 2002～06年度の期間の荘川桜苗木植樹数

地域名	植樹箇所数	内訳
北信越	2	新潟 2
関東	8	神奈川 4、埼玉 3、栃木 1
中部	20	愛知 17、岐阜 1、三重 2
近畿	54	和歌山 20、奈良 18、兵庫 14、京都 1、大阪 1
中国	7	広島 6、岡山 1
四国	23	徳島 10、高知 7、愛媛 6
九州	4	熊本 2、長崎 1、大分 1
合計	118	

を進めるにあたってできる限り環境に配慮する「自然を育む大切なところ」がどうして大切な、等が含まれており、教育の観点からも今後、未来を担っていく生徒のためになると、各地の学校からは非常に好評であった。なかには荘川桜のエピソードを読んで涙した先生もいて、高碓・初代総裁が勤めていた電源開発ってどんな会社だろうと、教員の皆様方が、神奈川県磯子石炭火

表2 2002～06年度の期間の荘川桜苗木植樹先（施設別）

施設別	植樹校（力所）数	備考（年度別植樹箇所数）
小学校	47	H15:10, H16:5, H17:14, H18:18
中学校	32	H15:11, H16:2, H17:8, H18:11
高校	1	H15:1
幼稚園	6	H16:2, H17:3, H18:1
公民館	2	H15:1, H18:1
公園	4	H16:1, H18:3
発電所	2	H15:1, H18:1
福祉施設	5	H15:1, H18:4
個人	2	H15:2
その他	17	道の駅周辺、神社等
合計	118	

力発電所見学に訪れた学校もあった。愛媛県の某小学校では、四年生の道徳の時間に莊川桜を題材に郷土の良さを見直す学習を実践してきたとのことで、苗木贈呈式の前後に、教材「莊川桜から学ぼう」を活用し、改めて、当時の莊川桜移植の経緯や人々の思いを学習したとのことである。社会科の歴史分野の既習事項を振り返りながら、戦後の高度経済成長を背景にした電力需要の拡大と、それを支えたダム建設等を多面的に学び、先生からは、「道徳の学習時には知らなかったことも教材等から知ることができ、社会背景を踏まえた総合的な視点から莊川桜の物語を理解することができた」と称賛の声が届いた。実際に植樹にかかわった生徒たちからは、「いろいろな人たちのところが詰まった桜を学校に植えられてうれしい」「大人になって学校に来た時に桜が咲いているのを見るのが楽しみ」といった声も届いた。当初、植樹にかかわった生徒たちが卒業してからも、学校では率先して二世の世話をしているとのこと、当社としては、莊川桜移植のエピソードを通じて、現代の子供たちに知ってほしいこと、例えば「互いを思いやるこころや人々がつくる信頼

関係」、そして「自然環境とエネルギー」といったことを、少しでもこころに残してもらえたのではないかと考えている。

おわりに

高碕・初代総裁は、なぜ、四百歳以上にもなる二本の老桜を「村のシンボル」と位置づけ、世紀の大プロジェクトにまでして守ったのか。どうして当時の技術では不可能であるといわれたプロジェクトを、あえて力を結集させ敢行したのでろう。それは、「エネルギーと環境の共生」という当社の企業理念そのものに基づいた行動ではあったが、どうしても、このプロジェクトにより生き残った莊川桜が絶えず現世の我々に何かメッセージを訴えている気がしてならない。地球環境問題が、温暖化や海面上昇など一国だけの問題ではなく、地球全体で考えるべきテーマとなっている今、人類全体がいま一度立ち止まって、本当にこのままでもいいか問いかけなさい、何か環境に對してできることはないか再考しなさいと、永遠に我々に対して問いかけている気がしてならないのである。

(おおい てつろう)



写真2 4世紀を超えて生き続ける莊川桜



連載 I
あの町この町
第 32 回

鉄が湯になる——富山県高岡市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト＝著者)

高岡市は今年（二〇〇九年）、開町四〇〇年を迎える。一月の「なべ祭り」に始まって、春は高岡築城まつり、ついで高岡メッセ・夏の部。九月、メインイベントの高岡開町まつり、記念式典が挙行される。

古くから市中では御車山、港では伏木けんか山が初夏をいろどってきたが、今年それが九月に再度、同じ日に同じコースを巡行する。そして高岡メッセ・秋の部。その間に「ものづくり城下町」高岡博覧会、飛越能物産フェア、工芸都市高岡クラフトコンペ……記念事業が目白押しだ。

「開町」とは聞きなれない言葉だが、文字どおり町が開けた。それが築城とかさなり合うのは、城づくりと町づくりが同時に進化したからである。

ふつうは一定規模の町が先にあって、そこへ城がつくられ、以後は城下町として発展

した。「築城〇〇年」はあっても、町そのものの初まりは確定しにくい。この点、高岡は珍しい例外というものの、一人の個性ある人物の強力なリーダーシップのもとに、急テンポで一つの都市ができていった。

高岡市経営企画部・開町四〇〇年記念事業推進室発行のパンフレットに、手ぎわよくまとめている。

「慶長十四年（一六〇九年）春、加賀藩二代藩主の前田利長公は、隠居していた富山城を火事で失うと、幕府の許可を得て直ちに高岡で築城を始めます……」

突貫工事で進める一方で、城を基点に町の縄張りにとりかかった。各地から人をあつめ町づくりをも進めていく。九月、利長入城。あらためて封建領主の抜群の力を感じるところだろう。のちの一国一城令で高岡城は取り壊されたが、大きな堀がとり

巻き、なかなかのスケールをそなえていた。その築城と町づくりとを、わずか半年あまりでやってのけた。

二代目というのは、たいていは影が薄いものだが、加賀前田家はそうではなかった。ために生・没年を添えておくと、

初代・前田利家 とじい 一五三八—一五九九
二代・前田利長 とじなが 一五六二—一六一四

利家は織田信長、ついで豊臣秀吉に任せ、秀吉五大老の一人として徳川家康につぐ実力者だった。秀吉の死後、秀頼を補佐した。その子利長は父とともに信長、秀吉に任せ、多くの戦功を立てた。天下取りを狙っていた家康が、もつとも警戒した父子である。

よく知られているエピソードだが、利家の死後、利長謀反の噂があった家康が征伐軍を向けようとしたとき、利長は母親を人質に差し出して嫌疑を晴らした。翌年の関ヶ



城社公園入口

原の戦いでは率先して徳川方につき、それが大きく戦況を動かしたといわれている。家康はこれを多としたのだから、利長に加賀・能登・越中の三国を与え、百二十万石というケタ外れの大藩が出現した。こういった歴史的経過からでも、前田利長の人となりがうかがえるのではあるまいか。勇猛で鳴らした武人だが、状況を正確に読みとる政治家でもあった。危難をかぎつけると機敏に対処し、豊臣の恩顧を受けたが、天下分け目の大一番には、豊臣ではなく徳川にいった。

一般に日本人はこういった人物をあまり好まない。主従の義理や武士の意地に殉じて、たとえ形勢が不利だとわかっていても敢えてとびこみ、悲劇的な死をとげるようなタイプをひいきにする。しかし、政治家として利長の行き方が正しい。おかげで領地はいちども戦禍にあわず、民衆を苦難にまきこむこともなかった。

つまり高岡は、そんな人によってつくられた。隠居していても隠然たる力をもっており、幕府から警戒されていたにちがいない。利長はむろん、自分にたえず疑いの目が向けられていることを知っていた。

となると高岡城築城と高岡の町づくりは、隠居地富山城を火事で失ったというだけにとどまらず、金沢、富山につぐ第三の拠点を考えてのことではなかったか。すでに近くに守山城という居城があったのに、それを捨てて「関野が原」とよばれていた土地を開き、築城の名人高山右近に城づくりをゆだねた。名づけにあたっては、まるで文化の衣でくるんだように『読経』の一節「鳳凰鳴けり、かの高き岡に」から「高岡」と命名。

それかあらぬか新しい町は実にいいところに位置していた。海岸には旧国府のあった伏木港をもち、内陸とは小矢部川と庄川

の川運で結ばれている。背後は穀倉の砺波平野である。領内の寺々は北陸真宗門徒の牙城であって、いわば要所に砦を配したぐあいなのだ。

元和元年（一六一五年）、つまり前田利長の死の翌年のこと、江戸幕府は一国一城令を発令。すぐさま高岡城を破却させた。まるで大いなる隠居の死を待って、拠点を一挙につぶしたぐあいではないか。

時をこえ

心をつなぐ

高岡開町四〇〇年

ポスターの左に大きく「2009」とあり、右には桃太郎のような可愛い武者が片手を上げている。利長公のマスケット・キャラクターだそう。上には鍵を組み合わせたようなマークと、デザイン化された「開町」の文字。マークは高岡城の堀をモチーフにし、文字のデザインは高岡の路地をイメージにして、ロゴタイプとしてつくったという。訪れたのは二〇〇八年十二月。記念年の始まる直前であって、行く先々にポスターが張りめぐらしてあった。よく見ると一カ所がちがついて、「私たちも応援しています」の下に協賛名がついている。ある通りでは「西川構装社・ふじ美容室・原絹光堂」

といったぐあいで、あきらかに地元で地道な商売をやってきた商店である。大スポンサーにたよらず、自分たちでやるという心意気がいい。

うれしくなつてトットと高岡大仏、古城公園、まっ赤な電車の走る広小路、本町、大手町と巡ってきた。一つ奥の通りが旧北陸道で、ガラリと雰囲気が変わった。山町筋（やまぢょうすぢ）といって旧来の高岡商人の町。昔かたぎの大工棟梁が腕を競つてというふうなみごとに二階家が並んでいる。

明治三十三年（一九〇〇年）、高岡で大火があつて、そのあとに生まれた。建築学では「土蔵造り」といわれるスタイルで、屋根は本瓦、あるいは棧瓦葺き、外まわりは黒漆喰塗り、二階の窓は観音開きの扉つき。平成の安普請を見慣れた目には、明治の本造りが夢の建物のように思えてならず、しばらく呆然と通りに佇んでいた。

その中の小じんまりした店だが、古風な軒の看板に「せいろ ふるい」とある。ガラスごしにのぞくと、たしかにせいろやふるいが棚に並べてあつた。せいろの木目が花模様のように美しい。白い薄板をワッカにしたふるいの丸みがナメめかしい。昔ばなしでは「器怪」といって生活具が化けて出たりするが、丹念につくられた道具はモノか

らイキモノになるようなのだ。

土蔵造りの一つが「まち資料館」になつていて、内部まで検分できる。通りに面してミセ、奥がミセザシキ、秤庭をはさんでオク、クラ。

「どなた様にも貸賣の儀一切御断」

ローンを組むなんて無責任な客は買つていただかなくて結構。柱の一札が、かつてのかたい商法を告げていた。

べつの一つが喫茶店になつていて、ハナ水をすすりながらとびこんだ。立派な木組みの下、シャレた白磁のカップでいただく珈琲は格別である。二階で何か催しがあるらしく、若い女性がテキパキと立ち働いて、階段を上がり下りしている。通りを高校生がつれだつて通つていく。短いスカートから、むき出しの白い脚。重厚な家並みにはハゲ頭の老人以上に若い女性が似合うことに気がついた。すでに時間を越えた存在であるせいなのか。そういえば歩き出してずいぶん時がたつたような気がするのに、腕時計を見ると、まだ二時間ばかり。

高岡は市中に五つの核をもっている。城跡の大きな公園、土蔵造りのつづく山町筋、「高岡鑄物」の中心だった金屋町、加賀藩の米蔵があつて米商人の町だった庄川沿いの吉久、それに前田利長の菩提寺として加賀

百二十万が威信をかけて建造した瑞龍寺^{ずいりゅうじ}界隈である。公園を市民のゾーンとすると、山町筋は商人、金屋町は工人、吉久はかつての農の集積場、瑞龍寺界隈は聖職者ゾーンにあたる。さらに赤い電車が結んでいる伏木町を漁業センターに数えていい。これほどバランスよく生活の各分野をそなえた町は珍しいのではなからうか。

金屋町はたのしいところだ。ゆるやかにうねった二本道の両側に、いかにも工人の里らしいつましい二階家がつづいている。おおかたが格子造りで、軒下に石を埋めこんだ細い水路が走っている。

町づくりにあたり、前田利長は砺波郡西部の金屋から鋳物師七人を招いた。現代でいう高級技術者をスカウトした。火を



高岡大仏

使うことからお城下とは千保川をはさむ工地を用意した。工人親方はさらにふえて計十一人。

町が成立するためには、鍋、釜、鉄瓶などの日用品が必要だ。ヤスリ、金槌、また鋤、鍬などの道具がなくてはならない。生活が落ち着けば灯籠や鐘などの飾り物がほしくなる。金屋町工人がその必要を一手になつた。

鋳物資料館で初めて知つたのだが、中世以来、鋳物師に一つの統轄機構というものがあつた。河内国丹南郡の領主で真継家といい、その免許がなければ吹屋（炉）を構えて鋳物業にたずさわることができない。高岡鋳物師たちも、真継家の「座法」とよばれるきまり厳守を誓約し、代替わりには新しく免許状を願ひ出た。そうやって四〇〇年にわたり鋳物技術のハイレベルを保つてきた。

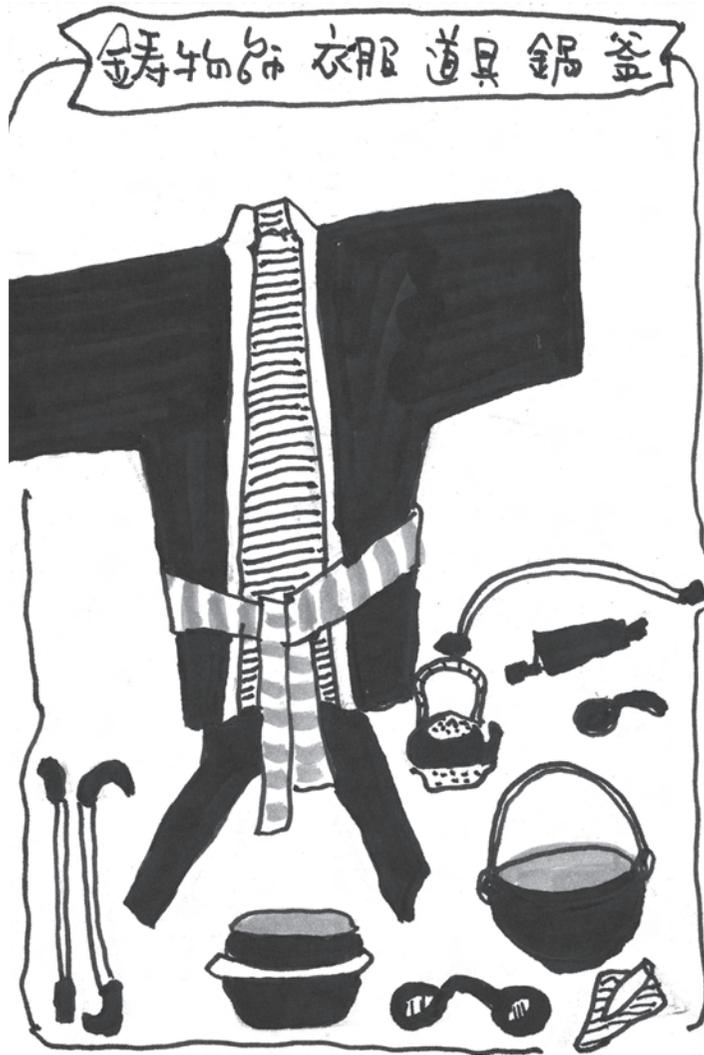
鋳物師の祭りを「御印祭」といって、「やがえふ」という歌がうたわれる。地金を溶かすための「たたら」を踏むときにうたった歌だそうだ。

河内丹南鋳物のおこり ヤガエー

今じゃ高岡金屋町 エー

エンヤッシヤ ヤッシヤイ

そんな歌い出し。たたら踏みは長い時間



高岡鑄物師の道具

高岡市民はガツカリしただろうか？ とんでもない。誤記を逆手にとつて、たのしいPRに打って出た。「立山連邦王国」の立ち上げ。開町から建国へ、スケールが一段と大きくなった。連邦国大統領はむろん「利長くん」で、建国会見の動画を製作。地元の酒は「連邦オフィシャルドリンク」、高岡出身の映画監督滝田洋二郎氏には映画『おくりびと』米アカデミー賞受賞

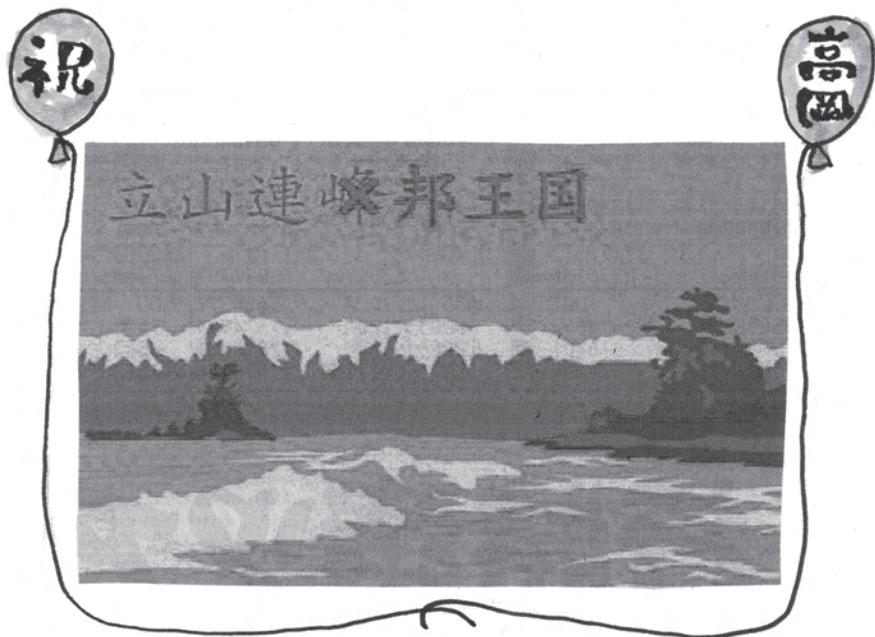
ついでながら、つい最近のニュースでござんじかもしれない。開町四〇〇年記念の切手が高岡より望める立山連峰をあしらってつくられたが、「立山連邦」と誤記したのができてしまった。

新奇の工夫でたくましくのりこえてきた。

がっかり辛抱のいる仕事だったので、労働歌として生まれたのだろう。我慢して踏んでいると、いずれ「鉄も湯となる釜となる」。高岡鑄物師には「仁安の御綸旨」という巻物が伝わっている。朝廷からの賜わり物で、それによると、鑄物師は全国にまたがって鍋・釜・鋤・鋤を自由に売っていい、諸役(税)免除、鑑札さえもつていれば諸国の通行自

由。昔ばなしにはまたしばしば、不思議の能力をもつ人が忽然とあらわれ、奇蹟を起こして風のように去ったことが語られているが、もしかするとその大半は、火でもって工作をした鑄物師だったのでなかろうか。開町四〇〇年の催しに「ものづくり城下町」「物産フェア」「工芸都市高岡」がうたわれているのは偶然ではないのである。

「受け継ぐ、育む、創造する。地域とともに歩む産業があります」高岡地域地場産業センターが誇らかに述べている。銅器、漆器、彫物、木工品、花づくり、アルミ製品、仏壇、その多くがアタマに「高岡」を名のっている。長い歴史につちかわれ、地場産業としてしっかり根づき、危機に何度も遭遇しながらそのつど新奇の工夫でたくましくのりこえてきた。



連邦王国建国

を祝して「国民栄誉賞」を授与。いずれ高岡駅に「記念出入国スタンプ」を設置の予定とか。いずれも町の若手経営者のグループ「高岡次世代経営塾」のアイデアである。若い世代はこうでなくちゃあ、の見本のような。旧米商人と聖職者ゾーンは明日にまわすことにして、昏れかけた冬の陽を背に宿に向かっていると、四つ角の店のガラス戸が目にとまった。「表彰創業一〇〇年以上事務所」とあって、白いプレートを赤いワクで囲ったのが金具でぶら下げてある。「一〇〇年以上」というところが、大まかでもよしい。軒下のガラスに「金物は毎日役立つ贈物」と、味のあるロゴスタイ

ル。「お客様用駐車場」と、こちらは目をむくような大きな字で書いてある。「お客様本位」というのは、まさにこういうのをいうのだろう。

ショーウィンドウに金物ならぬガラス物が飾ってあって、「イタリー製 おしゃれイテリアに」と添え書きがしてある。何の用とも判断がつかないので、店の品のいい奥さんにたずねると、「ハイ、何にでも」とのこと。どんな使い方にも応じられる。イタリア旅行のみぎりに、「つい惹かれて買ってきた」のだそうだ。「一〇〇年以上」ともなると、店の人もこんなに大らかなのである。

铸物は重くて、壊れなくて、いまや時代のハズレものになってしまったが、日本の近世が生み出した高性能のセラミックだった。高岡大仏はその一つであるとともに、高岡铸物の商品カタログの一つでもあるわけだ。鎌倉に勝る美男のホトケが口をひらけば、「鉄が湯になる」ものづくり町の千夜一夜が語られるにちがいない。

見知らぬ町ではあるが、なぜかまったくはじめてでもない。むかし恋ごころを抱いた人と久しぶりに対面するようで、なにやら全身がくすぐったい気がしてならなかった。(いけうち おさむ)



連載Ⅱ
風土燦々⑤

いだごろ踊りの山里（後編）

宮崎県美郷町南郷区

ルポライター

飯田 辰彦

渡川^{どがわ}中区の盆踊りは、渡川小学校の校庭が会場に充てられていた。校舎の横にテントを張った臨時の祭壇が設けられ、その目の前のスペースに集落の人たちが集まり出している。小さなライトが二つばかり黒い地面を照らしているだけで、特設の「棚」もない、何とも素朴な踊り場だ。

ところで、いだごろ踊りはどのようにして成立したのだろう。時は江戸の宝暦年間（二七五〜六四年）にさかのぼる。延岡藩の警護番の武士、飯田五郎は毎年今の南郷区に派遣され、庄屋の家に寄寓していた。毎日の食事に出てくるのは、ウサギやトリの肉ばかり。げげんに思つて料理番に確かめると、「小丸川^{おまる}の下流に鹿遊藪^{かのすみじら}という大きな滝があるため、魚がここまでは上つてこない」という返事。そこで五郎は、さっそく村人三人を伴つて木城（町）の川に赴き、そこでイダ（ウゲイ）を捕獲して、南郷に

持ち帰る。

これを小丸川に放流するとき、五郎は「魚の数が十分増えるまで、三年間は捕獲法度の触れを出した。三年後、イダは見事に南郷の川に繁殖し、村人はいつでも新鮮な川魚にありつけることになった。解禁に際して、住民たちはその喜びを踊りに託した。

魚を取り、網を操り、そして魚をビクに入れるといった所作を、上手に踊りに取り込んだのだ。やがて、住民たちは村の恩人である五郎の徳をたたえて、この踊りを「いだ五郎踊り」と名付けた。当初は川祭りの際に、魚の供養として踊られていたが、後に盆踊りへと取り込まれていったらしい。踊りとセットの軽妙な口説^{くどき}には、五郎の南郷におけるイダ普及の経緯が余すところなく語り尽くされている。

さて、盆踊りの開始時刻である午後七時が近づくと、さしものガランとした校庭に

も老若男女の人だかりができています。お盆に合わせて帰省した地元出身者も交じっているのだろう。彼らはまず、仮祭壇に線香を手向けた上で、おもむろに踊りの輪を作り始めた。谷の透き間の狭い空には、夏やせした青い月が煌々と輝いている。

区長の短い開会のあいさつの後、満を持して待機していた囃子方が、せきを切ったように太鼓と三味を鳴らし始めた。すぐさま調子のいい口説が重なってゆく。後にも先にも、これが私がいだごろ踊りに接する最初の機会だった。それは、想像していた盆踊りとはまるで違っていた。私は勝手に、古風な（盆踊り）という形容から、しつとりと静かな踊りであろうと決めつけていた。

なるほど、踊りそのものは所作がしなやかで、品^{ひん}さえ感じられる。しかし、囃子と口説のテンポがとてもしずみカルで、古風



飾らない渡川のいだごろ踊り。そこに盆踊りの原点を見た

というよりはモダンそのものといった感じ。まるでソフトロックの曲でも聴いている雰囲気なのだ。若い踊り子たちも、「この歌（いだごろ）は乗れるから好き！」と口々に言っていたくらいだから、確かに若い感性にも合うリズムに違いない。

その一方で、三味線が奏でるメロデーは、どこか沖縄の旋律を感じさせて、実にエキゾチック。南郷（宮崎）と沖繩との距離の近さを、いやが上にも思い知らされる。最初は遠慮がちに小さかった踊りの輪が、いつしか観客すべてを巻き込んで、大きく広がっている。

「この地区には、いだごろをはじめ各種盆踊りがすべて伝承されています。口説もたくさんあったのですが、歌える人がだんだん減ってきて……。十年ぐらい前までは、この地区でも一軒一軒新盆の家を回り、庭先で盆踊りを踊ったものです」

昭和七年生まれ、渡川の伝統文化保存に奔走する黒木藤実さんの言葉だ。いだごろのほかに、南郷で現在踊られている盆踊りは、「たかなべ」「兵庫ばんば」「二つ拍子」「二つ拍子」「ながはま」「してな」の計七つ。踊りごとに囃子（太鼓と三味）は変化するが、逆に口説はこれら七つの音頭と自由に組み合わせることができ。だから、同じ口説でも幾通りもの踊り方ができるわけだ。

口説の代表的なものは、いだごろ・新いだごろ（戦後に誕生）を別にすれば、「牡丹長者」「富吉仇討ち」「いろは」「おため半造」「おくま」「ながはま」「してな」などがある。富吉仇討ちやおため半造は全国的にも流布したものだが、これらが南郷の盆踊りと出合うとき、そこにまったく新しい生命が吹き込まれる。

十七夜には、鬼神野の川原地区で盆踊りが奉納された。本来なら馬頭観音の境内で踊られるのだが、にわか雨のために急きよ地区の集会所が会場に充てられていた。持ち寄った手料理で全員が腹ごしらえをした後、座卓を脇に寄せると、そこにささやかな踊りの空間ができた。狭い会場ではあったも、地区民が一丸となつて熱く盛り上がるには、それで十分のスペースだった。

この地区では、口説のベースは「おため半造」だった。やはり囃子は渡川同様リズムカルで、口説に入った瞬間に自然と体が動き始める。うれしいことに、ここには若い口説の後継者が育っていた。役場勤務の甲斐小百合さんがその人で、艶のある地声には、すでにしたたかな年季が感じられた。いだごろ踊りの山里に、まるで美しい一輪のユリが咲いているようだった。

（いいだ たつひこ）



連載Ⅲ
ホスピタリティーの
手触り53

ニセコで考えたこと

旅行作家

山口 由美

外国人によって
育てられる観光地

北海道のニセコに行ってきた。

オーストラリア人によって占拠され、一期は、地価上昇率が全国有数となり、今度
は円高で、潮が引いたようにオーストラリア
人が「いなくなつた」と報道されている、
あのニセコである。

実際に行ってみたニセコは、「去年よりは
少ない」と誰もが言うが、それでもゲレン
デは、オーストラリア人らしき白人系のス
キーヤーやボーダーが、当然のようにたく
さんいて、アジア系の顔であっても、必ず
しも日本語を話すわけでなく、東京よりは
るかにインターナショナルな空間であるこ
とに驚かされた。

報道は、やれ今年は信州のほう伸びて

いるの何のと、ニセコの陰りを強調するけ
れど、むしろ定番の観光地として浸透した、
と考えるべきだろう。バブルの様相を呈し
ていた昨年までに比べれば、客足は落ちて
いるのかもしれない。しかし、決してニセコ
から外国人が消えたわけではないのだ。

そもそもニセコにオーストラリア人が
やつてきたのは、いくつかの偶然が重なつ
た結果といわれる。たまたまニセコ在住で、
アウトドア・アクティビティーの会社を経
営しているオーストラリア人がいた。彼が
ニセコの雪質の良さに感動し、口コミで広
めたことから、オーストラリア人が来るよ
うになった。大挙して押し寄せるようになつ
たきっかけは、二〇〇一年の9・11、アメリ
カの同時多発テロだったといわれる。それ
まで、オーストラリアでは、スノーリゾート
といえば北米が定番だったのだが、テロで

足が遠のくようになったのだ。そして、よ
り近く、時差も少ない日本にいい雪がある
ことに気づいたのである。

そう、ニセコブームは、地元企業や地方
自治体がブームを仕掛けたのではない。自
然発生的に生まれたものなのだ。

だから、古くからニセコで店を構えてき
た住人などは、ホンネでは、外国人が押し
寄せてきたことを苦々しく思っていたりも
する。マナーが悪いの、オーストラリア資
本の建物が地元のルールにのっとっていない
の、ちよつと「外国人が多いですね」と口
火を切ろうものならば、うつぶんをぶちま
けられたりする。

でも、今や外国人あつてこそそのニセコで
あることは、厳然とした事実だ。

特に、オーストラリア人を引き寄せた、
例のアウトドア・アクティビティーの会社の



夜も外国人観光客の往来が絶えないニセコひらふの交差点

あるニセコひらふの町は、オーストラリア資本のコンドミニアムが立ち並び、ここはどこかの国かと思うほど、外国人率が高い。

しかし、考えてみれば日本人だって、パブルのころは、さんざんオーストラリアやハワイに観光客として押し寄せ、不動産を買いあさり、日本語の看板で街並みを占拠し

たのだから、おあいこである。

呼んでもいないのに来てしまった、という感じは、外国人を受け入れる姿勢にも表れている。必要に迫られてだろう、どこも英語メニューは完備している。でも、店員の対応は、基本的に日本語である。

「はい。ご注文お伺いします」

ニセコひらふの交差点近くにあり人気居酒屋の店員は、そう言いながらオーストラリア人のテーブルにやってくる。

英語メニューはあるのだから、指さしをすれば注文は可能だ。

「空揚げ、ツー。石狩鍋、ワン」と店員は数字だけ英語でカウントする。それがニセコ流なのか、コミュニケーションが滞っている様子もない。

やはり交差点近くにあるコンビニニエンスストアも、平日の夜だというのに、オーストラリア人、ロシア人、中国人などが入り乱れ、大混雑だった。ここでも居酒屋に輪をかけて、店員は、普通に日本語で対応している。

「いらっしやいませ」

ピツ、ピツとレジに入力し、合

計金額の数字を見ればいいのだから、それで何の問題もない。外国人観光客の側も、カタコトの日本語を覚えて使うことで、日本を楽しんでいるような様子もあった。

私は、ふと以前、「うちは外国人は泊めない」と語っていた老舗旅館のことを思い出していた。理由は、その旅館の主人が外国語に堪能でないからだという。いつになつたら泊めるのかと聞くと「自分が外国語をマスターしたとき」と大まじめな顔をして答えた。

笑い話のようだが、しかし、多くの日本の観光地のホンネには、幕末さながらの攘夷論が眠っている。背に腹は代えられないから受け入れるのであって、日本人だけで景気が良ければ、正々堂々「外国人お断り」と看板を掲げたい、そんな心模様が透けて見えることがある。

そうした日本人の心に眠る攘夷論を、結果として、大量の外国人が来てしまった事実が凌駕しているのが、今のニセコなのかもしれない。外国人観光客が、当たり前前に露天風呂に入り、味噌ラーメンに舌鼓を打ち、居酒屋で盛り上がる。彼らの笑顔に、日本も捨てたものじゃない、と改めて気づかされる。観光立国の未来が、そこにあるような気がした。

(やまぐち ゆみ)

旅の図書館
新着図書紹介



四六判 278 ページ
定価 1,575 円
日本経済新聞社

「大恐慌以来」などとも形容される世界同時不況のなか、個人の財布も家計も節約ムードが一気に高まっているご時世だが、逆に、こんな状況だからこそ、心を落ち着けて自分を見つめ直し、冷静に今後を考える時間や空間に身を置く大切さも忘れてたくない。

『嫌なことがあつたら鉄道に乗ろう』(野村正樹著、日本経済新聞社)は、そんなことを改めて思い起こさせてくれる一冊だ。

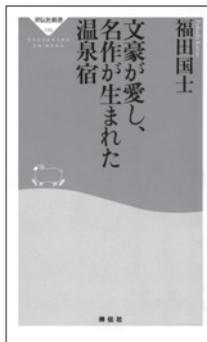
著者の野村氏は、「鉄道への思いや体験に、自身の人生をオーバーラップさせること」が「多くの人々に共通」するものであり、「列車の旅や、鉄道や車両たちに人生を重ね合わせながら、自分を慰め、励まし、勇気づけることもある」と記し、「嫌なこと、辛いこと」に打ち勝ちたい時や「人生の節目」に再出発を誓う時など、「ぜひ、鉄道に乗ってみませんか」と呼びかける。

厳しい経済状況のなかで、中高年に限らず、解

雇やリストラにより「再就職」の選択を迫られる局面も増えてきているが、「鉄道車両にも、その解雇やリストラや再就職はある」と言う。「格下げ」や「左遷」「転籍出向」させられた車両のなかにも夢と希望を与えてくれるケースがあり、そうした電車に乗ることで「新しい元気が湧いてくるのだ」と野村氏は指摘する。

その絶好の場所の一つが、静岡県を走る「大井川鉄道」だ。ここには全国各地から往年の私鉄名車が集まって、今も活躍している。野村氏は「それぞれの経歴だけを見れば、スターの座を追われた淋しい第二の人生かもしれない。しかし、どの電車も、ここではイキイキと輝いて見えるのだ」と書き、「乗客たちの笑顔を乗せて走る今の生活に心から満足しているかのように、意気揚々と走っているではないか」と凛々しく生きる人の美学」をたたえる。

野村氏は、「心を穏やかにしたい」「命の洗濯がしたくなった」などさまざまな状況で、その思いに応えてくれる各地の路線や列車を紹介し、「毎日の生活のなかで、ふと過去を振りかえり、未来を見つめたいと思ったときには、ぜひ、そんな鉄道に乗り、どこかの駅にふらりと降り立ってみよう。人生の途中下車の旅」という至福の時間が、そこから始まる」と記している。



新書判 272 ページ
定価 840 円
祥伝社

『文豪が愛し、名作が生まれた温泉宿』(福田国士著、祥伝社新書)は、全国に百二十軒ほどあるといわれる文豪ゆかりの温泉宿の中から、二十一人の文豪にスポットを当て、江戸から明治、大正、戦前、戦後と各時代へワープするように、宿に残された文豪たちの逸話をまとめている。

文中、時代小説で知られる藤沢周平が愛し常宿とした、九兵衛旅館(故郷の山形県庄内地方の湯田川温泉)を紹介。「かつての職場に近く、宿の娘は教え子で昔話ができるとあって、『九兵衛旅館』は気の休まる場所だったのだろう……」

著者は、小林多喜二、井伏鱒二、若山牧水など多くの文豪たちが創作活動の地として温泉宿を選んだ背景について、「執筆の合間の疲れを温泉で癒すだけではなく、温泉街の情緒にも魅力を感じてのことだろう」と指摘している。

来し方と行く末を考える旅へと誘ってくれる本書を読んで、体と心を癒やしてくれる温泉に思いをはせてみるのも悪くない。(挑圭)

旅行者動向2008 最新刊

国内・海外旅行者の意識と行動について毎年実施している当財団独自調査の分析結果を解説。最新号では「旅行先での現地情報収集の実態」「年間旅行支出からみた国内旅行マーケットのトレンド」を特集。〇八年七月発行。



Market Insight 2008

(日本人海外旅行市場の動向)最新刊 日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。日本語版、英語版あり。〇八年七月発行。



産業観光への取り組み

「産業観光」への取り組みと「着地型旅行商品」について、先進地(国内二十事例、海外三事例)を例に、分かりやすく体系的に、さらに今後のあり方、取り組み方について紹介した業界初の本。横浜商科大学教授・羽田耕治氏(財)社会経済生産性本部余暇創研(現(社)日本観光協会常務理事)・丁野朗氏が執筆・監修、J.R東海相談役・須田寛氏が推薦。〇七年十月発行。



温泉地再生

温泉好きの日本人が多いのに温泉地に元気がない、そのギャップへの疑問から始まった「元気な」温泉地の取材。さらにリーダーインタビュー、そして他分野のマーケティング調査など多様なデータをヒントに、温泉地の現代的・社会的な意義を探る。当財団主任研究員・久保田美穂子著 学芸出版社より〇八年六月発行。



※本書は、書店へのご注文をお願いします。

次号予告

お茶は、その文化とともに健康飲料として世界に広がっています。主要生産地として知られる静岡県を題材に緑茶文化の創造、茶葉振興などについて特集します。

調査研究だより

近年、「体験型」「交流型」旅行のニーズの高まりを踏まえ、地域資源を活用した新たな形態であるニーツーリズム旅行商品の開発・販売に向けた取り組みが盛んです。その中で、高齢化・過疎化が進む農山漁村では、「グリーンツーリズム」の推進等、観光や交流による農山漁村の活性化に期待が高まっています。しかし、旅行商品として開発・販売していくには、単価が低い、販売規模が小さい、商品開発の労力が多い等、民間旅行者業者にとって多くの課題があり、一部の先進的な取り組みを除いてはあまり裾野が広がっていないのが現状です。

当財団では、農林水産省事業の一環として、二〇〇七年度「農山漁村における宿泊体験活動受入のための手引き」を作成したのに引き続き、二〇〇八年度は、教育旅行だけでなく、親子や夫婦などが参加できるような農山漁村における滞在・体験型旅行商品以下、G.T商品を開発・販売するための研究を行っています。民間旅行者業者・業界団体、先進的なグリーンツーリズム推進地域等による研究会を立ち上げ、旅行者業者・農山漁村それぞれが抱える構造的な課題を踏まえつつ、連携・協働していくための新たな商品開発・販売のあり方について検討を進めています。当財団では、今後も、多くの都市住民等に農山漁村を訪れてもらえるよう、数々の課題を解決する効果的なアプローチを見つけ出し、農山漁村におけるG.T商品の開発・販売の促進に寄与してまいります。(鈴木)

編集後記

◆日本列島を桜前線が駆け上る季節となりました。冬の寒さに耐えて固まっていた心身を解き放たんと桜の開花を待ち焦がれる心境は、恋心に近いかもしれません。古来、多くの文人・画家が桜に託して恋愛感情や美意識、死生観を詩歌、俳句、小説、絵画にと結実させました。桜はまさに日本のこころであり日本文化の揺籃です。本特集では、桜の育成、桜文化の探求に深くかかわってこられた各氏に登場いただきました。含蓄に富んだお話を触れて、桜を愛でることのできる幸せをかみしめたいと思う次第です。

◆今では桜といえばソメイヨシノを目にすることが多いですが、日本各地の風土にに応じてさまざまな桜が自生しています。本号で取り上げられました荘川桜はヤマザクラ種のアズマヒガンザクラ。幹回り六メートル、樹高二十メートルの老桜です。荘川桜移植の物語は作家・水上勉に深い感銘を与え、小説「櫻守」のモチーフとなりました。

◆小川和佑氏は「著書『桜と日本人』の桜讃歌」あとがきにかえて「の中で、日本の桜文化は、古代以来の人びとが自然と共生しようとする優しい心の所産だったと、確信をもって語れるような気がしてならない。この伝統を私たちは受け継いでゆかねばなるまい」と語っています。「美しい日本の私たち」でありたいと願ってやみません。(宇八)



観光文化 第194号

第33巻2号通巻第194号

発行日 2009年3月20日



発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第1鉄鋼ビル
〒100-0005 ☎03-5208-4701
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第2鉄鋼ビル 旅の図書館内
〒100-0005 ☎03-3214-6051
<http://www.jtb.or.jp/library/>

編集人：外川宇八
発行人：新倉武一



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

I S S N 0 3 8 5 - 5 5 5 4